

因みに記す本文の談話者川上博士は、台灣基隆築港に於ける権威者にして、その功績は周知の事実にして、更に再説をまたざる所なるが、早田博士は大学を興え、暫らく台灣に遊び折柄、基隆築港中の川上博士の許に身を寄せて、學術研究上に多大の便を得られ、更に早田氏の研究成りて理学博士の称号を受けらるるに至りしも、川上博士の推薦あずかりて力ありしと。

今や早田博士は世界の植物學上の新定に大いなる疑問を抱きて、頗しく南洋の實地を踏破し、研究に身を委ねつゝあり、岡博士の研究にして大成の晩は正に世界の學說上に一大動を起さすべき時なりと云う。

而して早田博士をして南洋の實地にありて一身を研究に明け、更に後顧の憂い無からしむるは友情に篤き川上博士の多大の援助に賴るなり、この如き二偉人を出したるは我が長岡中学の誇りなり。

【解説】早田文藏については清二郎がこゝで紹介している通りだが、台灣産植物の研究者として知られ、その後東大教授・岡村眞小石川植物園長を務めた人、二人の友情関係はつとに有名で、清二郎が亡くなった時、早田は和同会雜誌に追悼文を寄せた。なお「長岡高等學校百年史」には清二郎の写真と共に、早田のその追悼文の原稿の一篇の写真も掲載されている。その追悼文は次に紹介する。

親友 工學士博士

川上浩二郎君を憶う

和同会雜誌第八十号

昭和八年七月十五日刊

東大教授

早田 文藏

昭和八年三月二十九日は、私にとって最大悪日である。それはこの日親友川上浩二郎君を喪つたからである。川上君は私の長教するところの親友であると同時に、又忘るべからざる恩人である。私が初めて岡君と相知るに至つたのは、私立長岡學校在學當時のことである。四十六年前の昔である。以来私は川上君の誘導啓蒙を仰ぎつゝ世に處して來たのである。今後に岡君と顯明境を異にするに至つては、何につけ、かにつけ、岡君を憶う種でないものはないのである。

回顧すれば三十三年以前、私が第一高等學校を卒業した夏のことであつたが、その当時川上君は、台灣總督府技師として、基隆に在つて活躍していられたので、私は岡君に手紙を送つて、台灣島へ植物採集に行きたいと思うが、どんなものかと問い合わせたところが、岡君は直ちに、熱烈なる同情をこめた返書を飛ばされて、私の台灣行に賛意を表し、必ず來れと、大いに奨励されたのであつた。

その書簡の一句は今尚記憶しているが「親愛なる君よ、天は君の熱心を憐れみ、必ずや君をして成功せしめん」とあつた。私はこの返書を手にして、実に天にも昇るばかりに、



雀躍して喜んだ。然し私は強りその歡喜を深く心に聚めて面にも現わさぬ積りでいたのであったが、我知らず微笑をもらしなごしつゝあったので、同室の学友（私は當時同校の寄宿舎寮に居た）に怪しまれて「何か嬉しいことがあるのか」などと聞かれた程であった。私は何人に告げもせず、卒業式の直後（七月初旬）、川上君をたよって台湾へ渡った。私は同君の許に寄食して同君の下に働く工夫という名義で、日当を貰いながら、然し實は目的の植物採集に熱中していた。その間、川上君は道情を以て私を通し、陸に歸し私を迎接されたのであった。それから私は台湾の採集を済ませた後に、対岸の厦門（アモイ）、香港、上海を経て、東京へ歸ったのは、その年十月の末であった。この旅行は遂に私をして、台湾植物の研究を以て終生の事業となさん、との志を樹てさせたものであった。これも川上君の温かい手が、私を力強く引き寄せてくれたのが、機縁となったものである。

爾來私は台湾へ行く毎に、必ず川上君の在職地たる基隆で採集して、それから、内部へ遡入るのを例としていた。それで川上君は常に「基隆は君が台湾植物研究の最初のページだ」と言っていていられた。基隆は川上君のためにも、私のためにも、実に思ひ出の深い地である。

或る年のこと、私は例によつて川上君の所謂最初のページなる基隆で採集している時のことであつたが、私はこの當夏の国の豊富な植物相に氣をとられて、無念無想、唯珍奇の種類に驚喜の目を轉るばかりであつたので、立入るを禁ずという制札のあるもの知らず、要路地の奥深く侵入して、悠々採集を遂げて、夕刻川上君の官舎へ還つた。やがて晚餐を

俱にしながら、その日の収穫の豊富なことなど話したときに、川上君は愕然として「それは大変なことをした。あそこは要塞地だから、見付かったら捕縛されたのであった。明日は司令官に会って、更めて、要塞地内探集の許可を受けて来よう」と言われた。翌日同君の話によれば、司令官は「あの場所は極秘のところだ、普通は将校と雖も立入るを許さないものであるから、其処へは遣入らないで貰いたい」と言われたのである。へたな軍人などに見付かったら、どんな目に遇ったかも知れないと思うと、今憶い出してもぞつとする。かゝる地域内をも安全に探検することが出来たのも、一つに川上君の大いなる庇護に因るものである。

当時川上君は基隆築港局の主任をしていられた。この築港事業の完成したのも、同君の努力に因るものである。同君は築港に關する論文を提出して工学博士の学位を獲られたのであった。私が十二年前に台湾へ行ったときには、川上君は既に同地を去られた後であったが、私は同君が基隆に於ける成功を物語る川上記念館を親しく訪ねて、時の移るまで立ち去りかねたのであった。

その後の川上君は、相変わらず私に対して關心をもたれて、骨肉も及ばざる同情者であり、指導者であった。殊に昨年の春以来は、私が専攻する學業のために一意所信に邁進し、四面楚歌の中に在って、孤軍奮闘しつゝあるに方（あた）つては、終始私に激励の言葉を投げられ、又本年二月再び學界に対して抱負を披瀝して際の如きも、親しく斡旋の勞を執る

を惜しまれなかった。昨今の川上君は、依然健康でいられることゝ思っていたが、突然、長逝されたとの訃音に接したとき、私は茫然自失するばかりであった。

私はこの三四年来、心臓に痼疾を得て、一年の半ばは病床に親しんでいる有様である。川上君は常に壯健で、事有る毎に私のために奔走して呉れた。然るに健康の川上君は俄に死の手に迎えられ、常に往生を覚悟していた私が、この親友の靈前に弔詞を捧げんとは、如何に有為転変の世なりとはいえ、余りのことではあるまいか。然し、生ある間は必ず為すべき事がある。私は如何にもして、もう兩三年はこの娑婆に頑張つて、所信に邁進し、あくまでも奮戦して、刀折れ矢尽きた後に、悠々川上君を地下に追つて、永遠の眠りに就きたいと思っている。

川上君の長逝を悼んで閑々の情遣らん方なく、茲に追憶の文を草して、聊か自ら慰める次第である。

【解説】 浩二郎が亡くなった時、親友早田文蔵もまた病に臥せていた。しかし自分は「もう兩三年はこの娑婆で頑張つて」と意を奮い立たせたその早田も、翌年の昭和九年一月十三日に亡くなった。早田は出生も逝去も浩二郎の一年後、奇しくも浩二郎のあとを追う人生であった。